

玉川教会たより

日本基督教団玉川教会
町田市玉川学園 4-5-32
電話 042-732-9321

「祈りと共に」

「主よ、わたしの祈りを聞いて下さい。この叫びがあなたに届きますように」

(詩篇 102 編 2 節)

2018年度が始まり二ヶ月近くが経ちました。4月の終わりに開催された教会総会において今年は「祈りと共に」を教会の一年の標語とすることが決まり、「祈り」の大切さを改めて学びつつ実践していきたいと願っています。

この「祈り」を改めて一年の歩みのテーマに掲げさせて頂いたのは、わたしたちが「祈り」の力の素晴らしさに改めて気付きを与えられる事が大切であると考えたからです。

祈ることは、わたしたち人間に元々備わっている一つの能力とも言えるものです。何かしらの信仰を持ち生きている人はもちろんのこと、たとえ信仰を持たずに生活してきた人でも、必ず何か「祈る」ことを知っているのです。何か願いを叶えて欲しい時、苦しい状況から助け出して欲しい時、わたしたちは自分ではどうにもできなくなると、自分の存在を遙かに超えた「何か」に言葉を届けようとするのです。

「苦しい時の神頼み」という言葉がありますが、この言葉はある意味でわたしたち人間の本質をよく表しているのかも知れません。いつもは存在を忘れているのに、窮地に陥った途端に思い出したかのように「神さま」という存在を思い出すというのがわたしたちです。神さまからすれば「恥知らず」な本質がそこにはあるからです。

しかし、極端にいうならば、祈りの力を知る時とは、わたしたちが何らかの困難に出会っている時しかないとも言えます。わたしたちは平穩無事な時には、あまり真剣な祈りをするのではなく、自分や家族、友人といったつながりを持っている人に何かあった時に、始めて真剣に祈り、求めることになるからです。わたしたちは窮地に陥らないと祈るべき相手も、祈るべき言葉も思い出すことができないのです。そして、いつもは聞いて頂けているのかどうかは考えないのに、そのような時にこそ「わたしの祈りを聞いてください」という「叫び」を口に出してしまうのです。

この「叫び」という言葉は、一度や二度のことではなく、ずっと叫び続けていることを表現しています。つまり、祈りの言葉が聞き届けられることを願いながら、神さまに願っている状況です。しかし、神さまはこのような「苦しい時の神頼み」のような言葉でも、ようやく思い出した「恥知らず」なわたしたちの「叫び」を聞いて下さる方です。どんなに離れていても、御自分の元に返ってきた者の言葉を受け入れて下さる方なのです。

この方に「叫び」が届くようにと、諦めずに、どこまでもすがり続けていく信仰者の姿勢がこの言葉で明らかにされていることを改めて覚えつつ、新たに始まった信仰生活の基に祈りを置きながら歩んでまいりたいと思います。